

The use of the classic literature as cultivation in Japanese literature
— As an example of the “sites of interest” in the *Yamato Meisho Zue* —

AO Asuka
Nara-Gakuen University
Faculty of Education for Human Growth

Abstract : A sightseeing guidebook of the latter part of Edo Period, *Yamato Meisho Zue*, is a book with inserted pictures edited by Akisato Ritou, and was a best seller at that time. The editor was interested in the ‘sites of interest’ which was defined by waka poetries. It is thought that the book was edited in the concept that the readers would refer to this book when they try to make and recite their waka and haikai poetries at those sites. The readers of the book are supposed to have been literary figures, and it is noted that they were enjoying waka as cultivation. The use of classic literature as cultural education in the literature of Edo Period such as in *Yamato Meisho Zue* is highly suggestive when we discuss about today’s classic literature education and cultivation.

Keyword : classic literature, cultivation, *Yamato Meisho Zue*, Akisato Ritou, Waka Poetries

日本文学における教養としての「古典」利用

— 『大和名所図会』での「名所」規定を例として —

奈良学園大学人間教育学部 阿尾あすか

キーワード：古典文学・教養・大和名所図会・秋里籬島・和歌

はじめに

学習指導要領改訂の途次で文科省が出した資料、「審議のまとめ」では、「古典や近代以降の作品をはじめとした我が国の言語文化に触れて感性や情緒をはぐくみ、言語文化を享受し継承・発展させる態度を育てる^{注1}」ことをうたい、小学校からの古典教育を本格化する姿勢を示している。本来、言語文化とは、これまでの様々な文学文芸作品を基層として成り立つものである。とりわけ、日本文学、それも近代以前のものを鑑賞する場合、それ以前の古典文学の素養がなければ、作品そのものを理解することができないという問題が発生する。このことは、古典文学がいかに長年、日本人の教養の中心を占めてきたかを表すものである。小・中・高等学校のみならず、大学教育においても、教養として古典文学を学び親しむことは、次の日本の言語文化の継承・発展を担う上で、重要なことと考えられる。

本稿では、江戸後期の名所案内記『大和名所図会』において、「名所」を規定するのに、

古典文学作品がどのような役割を果たしているかという問題を取り上げ、そこから、日本の言語文化において、教養としての「古典」文学がどのように利用されてきたかを見たい。また、それは、江戸時代の教養の在り方についてを明らかにすることもある。江戸時代の「教養」の在り方は、現在の「教養」の在り方を考える上でも示唆的なものとなる。稿者は国文学研究の立場ではあるが、教員養成および大学教育の一端に加わる者として、この問題について考えてみたい。

一

はじめに、「名所」の成り立ちと『大和名所図会』について概観しておく。そもそも「名所」とは、主に和歌に詠まれた場所のことを言い、さらには物語または歴史の舞台となった場所のことをも言う。和歌によく詠まれる場所のことは「歌枕」というが、それよりは広義に用いられる言葉である^{注2}。和歌や連歌、俳諧で詠まれることが多いため、それら韻文の世界で名所をまとめることが早くより行われた。和歌では、平安時代以降、『能因歌枕』『五代集歌枕』『歌枕名寄』などの歌枕書が編まれている。江戸時代になると、旅人が歌枕を中心に名所を巡り歩くという物語形式で、そこにその名所についての簡単な説明を添える名所案内記、いわゆる「名所記」

が登場する^{注3}。そして、安永九年（一七八〇）に、京の人、秋里籬島が編纂し、大坂の浮世絵師、竹原春朝齋が挿絵を描いた『都名所図会』が出版されるに至り、名所案内記の画期となった。その後、好評を得て、『拾遺都名所図会』『大和名所図会』『江戸名所図会』など各地の「名所図会」が出版されブームを巻き起こす。「名所図会」の新しさは、「歌枕に必ずしもこだわらず、体系的に名所を網羅し」、それに「詳細な挿絵」をつけたことであつた^{注4}。「名所図会」は旅のガイドブックとしてだけでなく、読み物に耐えうるものとして、当時の読書人に歓迎されたのである^{注5}。

『大和名所図会』は、『都名所図会』とその続編である『拾遺都名所図会』のヒットを受けて、同じく秋里籬島の編纂、竹原春朝齋の挿絵によって寛政三年（一七九一）に刊行されたものである。

同書の作者の秋里籬島^{注6}は、京の人、姓は秋里、名は舜福。俗名を仁左衛門といい、籬島は出家後の名である。湘夕、舜福、斑竹と号した。享保年間末頃に生まれており、文化九年ごろまでは生存していたとされる（藤川2008:64）。文筆家、俳人、歌人、作庭家として知られ、俳諧は練石、和歌は伴蒿蹊に師事した。寛政初頭には、天明八年の火災で焼失した内裏の再建に召されて三年程出勤していたとされ、有職故実にも詳しくあったらしい（藤川2005:28）。『大和名所図会』には籬島の自作の俳諧と和歌も多く掲載されており、彼の文才を物語っている。

『大和名所図会』は全六巻七冊で、大和一国十五郡の名所を網羅する。籬島、春朝齋は、取材も行っているが、籬島自身の跋文にもあるように、主に、編纂途中で亡くなった膝禹言（植村禹言）の『大和名勝志』の草稿を基にしており、これに「他の先行文献に拠るなどして加筆」している^{注7}。実際、本文を比較してみると、全くそのまま記述を引用する箇所も多い。以下、平群郡「龍田川」の項目を例に見てみよう。煩雑ではあるが、まずは『大和名勝志』の記述を引く。

○龍田川

①大和志曰自「広瀬郡」流経「勢野」至「立野村」西亀瀬「入于河州」蓋以「立野」為「漕運之津」。從「是」小舟上「達」初瀬川於「加幡村」又達「寺川」於「今里」呼曰「高瀬舟」。

②或書云龍田の町を西へ出れば川有。是竜田川也。此川上を平群谷と云。生駒嶽の麓より出る川也。立野の西に紅葉川とて小溝有。是を竜田川と云はあやまり也云々。

③立田川紅葉乱れてなぐるめり渡らば錦中や絶なん 読人不知 ならの御門の御歌となん

古今集及大和物語に奈良の御門の御歌と有

古今秘書云文武の人丸を御供にて竜田川遊覧の時よみ給へる御歌と云々

④阿古根浦口伝云此歌は大同一二年八月十二日平城天皇竜田川に行幸侍き。

川上に紅葉錦を張たるごとくにて面白きに水神水より出て皇に向てよめる歌也。それを帝の歌と申也。実水神の歌也と云々。

（本文は奈良県立図書館情報館蔵『大和名勝志』に拠つた。句点は私に付した。訓点は原文ママ。）

『大和名勝志』ではこのあと、龍田川に関する和歌を、勅撰和歌集入集歌を中心に五十首以上抄出する。『大和名所図会』も、和歌を抄出する箇所まではほぼ同文である。以下、引用する。

龍田川（一）広瀬郡より流れ、勢野を経て、立野の西亀瀬に至り、河州に入り立野にて漕運の津とす。舟は上初瀬川を加幡村に通ひ、又寺川を今里に通ふ。高瀬舟といふ。（二）或書に曰く、龍田の町を西へ出づれば川あり。是龍田川なり。此川上を平群谷といふ。生駒嶽の麓より出づる川なり。立野の西に紅葉川とて小溝あり。是

を龍田川といふはあやまりなり。

(3) 龍古今 田川紅葉みだれてなぐるめりわたらば錦中やたえなん 読人しらず

古今秘書に曰く、文武帝人丸を御伴にて龍田川遊覧の時、よみ給へる御歌といふ。(4) 阿古根浦口伝に曰く、此歌は大同二年八月十二日平城天皇龍田川に行幸侍りき。川上に紅葉錦を張りたることくにて面白きに、水神水より出で、皇に向つてよめる歌なり。それを帝の歌と申すなり。実は水の神の歌なりといふ。

(本文は架蔵の寛政三年板本に拠った。句読点は私に付した。)

①の傍線部の箇所は、幕撰の地誌『大和志』からの引用である。(1)も書き下しではあるが、①の『大和志』の記述をそのまま引用する。ただし、(1)では、『大和志』からの引用であることに断りを入れていない。この箇所に限らず、『大和名所図会』では、『大和志』からの引用の場合、明記しない場合も多い(藤川2006:3)。幕撰の地誌であり、現地の調査などを行って書かれた『大和志』は情報の信頼性が高いため、籙島が記述内容を事実として捉え、書名を明記する必要もないと判断したものか。

②と(2)の波線部、④と(4)の箇所もほぼ同一の内容である。③と(3)の二重傍線部の箇所では、③の方がより詳しく、(3)がある程度、③の情報を選別して記載していることがわかる。これは、(4)(④)の箇所でも、(3)(③)に引用した和歌の作者が平城天皇(＝奈良の御門)という言い伝えを記しているので、情報の重複を避けて、③の同内容の箇所は除外したと考えられる。

また、(3)では、③の『古今集』(＝『古今和歌集』。以下、勅撰和歌集は略称する)や『大和物語』など著名な古典の記述を削除し、『古今秘書』という『古今集』の歌学秘書の記述を選択していることにも注目される。(4)で引用されている『阿古根浦口伝』も歌学秘書伝書の一つであった。歌人でもあった籙島にとって、歌学秘書伝書の情報の方が信頼性があり、重要だと判断したからなのか。しかしながら、ある程度の素養を持った読者を対象とする場合、著名な『古今集』『大和物語』を引用す

る方が、読者にとって内容を再確認でき、ありがたがられるはずである。なぜ、著名な歌集・物語の引用を優先しなかったのか。

同様の現象は、この龍田川の箇所ばかりでなく、後述する他の箇所にも見える。本稿では、この『大和名所図会』の古典文学引用の選択の問題に焦点をあてて論じたい。そこから、籙島が、『大和名所図会』の読者として具体的にどのような人々を想定していたのか、同書の編集の意図が浮かびあがると考えるからである。また、ひいては序章で述べた、江戸時代の知識階層の古典教養の身に着け方という問題へと照射できるであろう。

二

ここで、『大和名所図会』が引用している文献・古典作品について確認し、籙島の関心がどのような分野の古典作品にあったのかを見ておきたい。同書では様々な文献、古典作品を引用している。俳諧・漢詩句については挿絵と共に、出典を明記しないものも多い(文末【図1】参照)。こうした出典を明記しないものや、『大和名勝志』からそのまま引用したものであっても排除せずに数えたところ、『大和名所図会』で引用された文献は、自作と思われる狂歌・俳諧・漢詩句を含めて342件にのぼった。その中には、『大和志』や『和州旧跡幽考』などの地誌・名所記、『日本書紀』や『日本三代実録』などの六国史、『百鍊抄』『神皇正統記』などの歴史書といった、史料として信頼性の高いものから、勅撰和歌集二十一代集などの歌集や、『袖中抄』や『井蛙抄』などの歌学書、『仙覚抄』『古今集素伝懐中抄』などの和歌注釈書、『竹取物語』『源氏物語』『宇治拾遺物語』といった文学作品、果ては『西曼荼羅抄』や『薄双紙』などの仏典・仏書までと、幅広い分野の文献が含まれている。こうした様々な資料を博搜して記すのは、近世の地誌の特徴であり、また、『大和名所図会』で引用した文献の多くは、『和州旧跡幽考』や『廣大和名勝志』など先行する名所案内記の引用

を踏襲するものであった。しかしながら、籬島自身が再度、これらの原典にまで遡って確認し、時には取捨して記述していたことも既に指摘されている(藤川 2006)。更に、俳諧を地誌・名所案内記に引用したのは、籬島独自のアイデアであった。従って、籬島の先行文献・文学への関心の在り方を分析する意味で、『大和名所図会』における文献・古典作品の引用状況を検討するのは重要と考えられる。

以下、『大和名所図会』に引用された文献・古典作品がどのような分野のものにまで及んでいるかを調査し、件数の多いものから順に表にまとめた(文末【表1】参照)。7件となっている地誌については、先述のように書名を明記しないで引用されることも多いため、潜在的にもっと多い件数を含んでいる可能性がある。しかしながら、それを差し引いても、和歌・歌書の類からの引用が圧倒的に多い。これに俳諧からの引用が次いで多い。俳諧の発句や和歌、特に前者は、その殆どが挿絵に添えられている。これは、挿絵と共に、読者が現地を想像することを助ける役割があったことが指摘されている(西野 2001.39・ゴーリ 2011.155)。読者にとって俳諧や和歌が浸透しており、いかに親しみのあるものであったかが窺われる。特に、和歌に関しては、挿絵がなく、本文中に引かれるものも多い。また、本文中に引用した和歌についての注釈を、歌書から引用する場合も多く見られる。名所の成り立ちが、歌枕と密接に関わっていることからすれば当然のことだが、和歌によって規定されたその名所の持つ文学的イメージを読者に喚起する効果を狙ったと考えられる。

和歌や俳諧に次いで多いのは、物語である。『宇治拾遺物語』『古今著聞集』などの説話集、『平家物語』『太平記』などの軍記物語、『大鏡』『栄花物語』などの歴史物語は、その土地の伝承や歴史を語るものとしての引用と考えられる。それ以外での物語の引用は、『竹取物語』『源氏物語』『住吉物語』の王朝物語、『伊勢物語』『大和物語』の歌物語の併せて5件に留まっている。物語注釈は、『河海抄』をはじめとする『源氏物語』の注釈書4件である。物語については、必要最小限に留まる引用であり、和歌からの引用に偏重している。『大和名所図会』においても、文学的舞台

としての名所のイメージ規定は、やはり和歌や俳諧に拠るところが大きいようである。実態は、どうなのか。次章にて、具体例をあげて検証する。

三

『大和名所図会』には冒頭の口絵で、大和ゆかりの「国栖奏」「春日野」「滝坂道」の三場面が用意されている。「春日野」の場面は、平安時代の装束を着た貴族の男女が描かれており、男が女を垣間見している挿絵の左上に、

新古今

春日のゝわか紫のすり衣忍ぶのみだれわたりしられす

業平朝臣

と、『新古今集』恋一(994番歌)に採られた在原業平の歌が記されている(文末【図2】参照)。この歌の典拠が、『伊勢物語』第一段「初冠」に拠ることは人口に膾炙しているところであるが、『大和名所図会』では、そのことには一切触れていない。また、『伊勢物語』第一段では、在原業平に仮託される主人公がこの歌を贈った相手は、美しい姉妹であったが、『大和名所図会』の挿絵では女性は一人である。

確認のため、『伊勢物語』第一段を引く。

むかし、男、初冠して、奈良の京春日の里に、しるよしして、狩にいにけり。その里に、いとなまめいたる女はらからすみけり。この男かいまみてけり。思ほえず、ふる里にいとほしたなくてありければ、心地まどひにけり。男の、着たりける狩衣の裾をきりて、歌を書きてやる。その男、信夫摺の狩衣をなむ着たりける。

春日野の若むらさきのすりごろもしのぶの乱れかぎりしられず

となむおひつきていひやりける。ついでおもしろきこともや思ひけむ。

みちのくのしのぶもちずりたれゆゑに乱れそめにしわれならなくに

といふ歌の心ばへなり。昔人は、かくいちはやきみやびをなむしける。

(本文は小学館新編古典文学全集に拠る。)

古都、奈良で見かけた美しい姉妹を見初めた男が、思わず歌を贈る。春日野に生える若々しい紫草、その紫草で染めた紫はひととき美しいのですが、そのように美しいあなた方にお会いして私の心は、この狩衣の摺り模様のように千々に思い乱れております。まだ元服したばかりの、少年のおもかげを多分に残す男が、初めて恋の衝動に突き動かされる。大人の男としての一歩を踏み出した瞬間。その青春の初々しい恋を鮮やかに描き出した場面である。絵画のモチーフとして定着し、板本の挿絵にも登場するが、それでも描かれるのは、男と姉妹の三人である。この有名な場面を、当然、秋里籬島が知らぬわけはない。板本の『伊勢物語』は、江戸時代、何度も再版・復刻を重ねたロングセラーであった(片桐 2001)。

一方で、『新古今集』994番歌の詞書では、「女に遣はしける」とのみあり、姉妹とは述べられていない。この場合の「女」は女性一人を指すものと考えられる。『大和名所図会』の挿絵も、この『新古今集』の詞書に準じたものと推定しうる。籬島は物語よりも、和歌の方をより価値あるものと捉えたがために、『新古今集』を優先したのであろうか。

しかしながら、一方で、『伊勢物語』を引き、そこが同物語に依拠した名所であることを示した記述も見られる。

巻一「添上郡南都之部」、東大寺近くの名所「武蔵野」について、以下のように述べている。

武蔵野は若草山の麓松生茂りたる所也。武蔵塚あればかくいふとぞ。

伊勢物語

むさしのはきけふはなやきそ若草のつまもこもれり我もこもれり

古今抄曰此かたは業平朝臣二条の后をぬすみてならの京へ具しける時に後のよませられし歌也

「武蔵野」とは、武蔵塚があるためのように言う、と名の由来を記した後、その場所ゆかりの和歌として、『伊勢物語』第十二段「武蔵野」の作中歌のみを引用する。次いで、昔、在原業平が二条の后、藤原高子を盗み出して共に逃げてきた場所は、大和の春日野だとする『古今抄』の言説を引き、この「武蔵野」がその場所だと説明している。『古今抄』は『古今集』の注釈書であるが、ここでは、室町後期成立の宗祇による注釈と考えられる。

『古今集』では、先にあげた「むさしの」の歌が、初句は次のように異なっており、

春日野はけふはな焼きそわか草のつまもこもれり我もこもれり

(17・春上・題しらず・読人しらず)

「武蔵野」が「春日野」に変わっているが、このように変わってしまった理由についても、『大和名所図会』では、挿絵の場面(文末【図3】参照)において、『古今抄』を引用して説明している。

業平朝臣二条の后をぬすみて平の京より奈良の故京へ具し奉りける程に御せうと基経大臣国経大納言此事をきつてとりかへし奉らんと多くの人々を出し給ぬける。さればいせ物語にはむさし野といひ古今には春日野の中にあるにより

てかすが野とはなをし入れられると云ふ。

藤原氏の后がねであつた藤原高子を盗みだした在原業平の話は、『伊勢物語』第六段「芥河」に語られるものだが、『古今抄』では、第十二段もそうだという。そして、「武蔵野」と呼ばれる場所が大和の「春日野」の中にあるので、『古今集』では、「春日野」に直されて入集したのだという。

同様の、17番歌と『伊勢物語』第六段とを結びつける説は、鎌倉期から室町中期にかけての『古今集』古注釈にも見え、流布したものであつたようである^註。たとえば、室町後期の成立ではあるが、『古今集』の注釈書、『内閣本古今集注』では、以下のように古説を紹介している。

又、依伊勢物語には、女をぬすめるは二条后也。業平、母の奈良に在す所へ行程に、春日野中の武蔵守安世卿墓所にかくし置けるによりて武蔵野とは云うと云々。せうと達の尋を云也。(以下省略)

(本文は深津睦夫(1998)に拠つた。)

大和の「武蔵野」の由来となつたされる「武蔵塚」については、鎌倉期以降に成立したとされる、名所歌枕の集成『歌枕名寄』に次のように見え、歌枕として認知されていたようである。

或云、春日社以南有大森、是則大納言兼武蔵守良峰安世卿之墓所也。仍号武蔵塚。崇彼卿而為神。素性法師、手向丹者綴乃袖毛可切之歌、於彼所詠之、彼塚名号手向山也云々。

(本文は新編国歌大観に拠り、句読点は私に改めた。)

こうした歌枕の歌書を踏襲して、『和州旧跡幽考』には、「武蔵塚」の項が設けられており、江戸時代には既に名所の一つとなつていたことが窺われる。煩雑ではあるが、『大和名所図会』の記事と比較するために、以下引用する。

武蔵塚 号手向山

或人いはく此塚は東大寺乃八幡宮のうしろの山を手向山といふ。又此山を武蔵塚とも号する也と云云。

此山は春日の社より北にあたり。いかゞとぞおぼゆる。澄月歌枕に武蔵つかは春日の社の南に森あり。それぞ安世卿の墓所なりと云云。

むさしづかは大納言兼武蔵守良峰安世卿乃墓所むさしづかと号しかの卿を神に

あがめる所也^{能因}。素性法師爰よりまうで、よめる^{古今抄}。

手向^古にはつゞりの袖もきるべきにもみちにあける神やかへさん

此歌よりして手向山ともいふとぞ。

『和州旧跡幽考』では、素性法師の和歌ゆかりの歌枕として、武蔵塚に言及し、『伊勢物語』には触れない。また、『広和名所志』になると、この項目自体が設けられていない。このように、『大和名所図会』と親和的な両書の記載と相違があることからすれば、『大和名所図会』の「武蔵野」の記述は、秋里離島自身の古典文学に関する知識を活かしてのものであつたことがわかる。

ところで、『伊勢物語』第十二段は、駆け落ちして逃れる男女の話ではあるが、業平と高子の恋の伝説と結び付くものとは、現在、捉えられていないものである。確認のため、以下に引用する。

むかし、男ありけり。人のむすめを盗みて、武蔵野へ率てゆくほどに、ぬすび

となりければ、国の守にからめられにけり。女をば草むらのなかに置きて、逃げにけり。道来る人、「この野はぬすびとあなり」とて、火つけむとす。女わびて、武蔵野は今日はな焼きそ若草のつまもこもれりわれもこもれりとよみけるを聞きて、女をばとりて、ともに率ていにけり。

親の目をくぐつて女を連れて逃げた男が、武蔵野まで逃げたが、国守に捕縛されてしまう。女を草むらの中に置いて逃げたが、後を追ってきた者が「この野には盗人がいるそうだ」と言つて火をつけようとする。女は悲しんで、「武蔵野を今日は焼かないください。私の夫も隠れています、私も隠れています」と歌を詠んだ。それを聞いて、追つての者は女を捕まえて、捕まえた男と一緒に連れて行つてしまつた。

この話の前後の第十く十三の章段は一般に「東国章段」と呼ばれる。十段は、武蔵の国に至つた男が「人間の郡みよしのの里」の女に求婚し、その母に受け入れられた話が、十一段には、男が京の友人たちに歌を贈る話が入り、十三段では、武蔵野国にいる男が京の妻に歌を贈る話が続く。『伊勢物語』の規模と章段の排列については、当初から現今の通りではなかつたというのが通説であるが、『古今集』や『伊勢物語』の注釈が多く作られるようになった室町期には、すでにこの排列であり、十二段の「武蔵野」も、やはり武蔵国の武蔵野と解されるものであつた。

しかしながら、「冷泉家流伊勢物語注」と称する、一連の『伊勢物語』の古注釈書の類では、第六段と結びつけて、この第十二段も業平と高子が、大和へと逃げて来た話であると解釈する。そのうちの一つ、『増纂伊勢物語抄』を引用する。

人の娘を盗てとは、長良の中納言奈良に住給し時、二条后末内裏へも参給はで、卜定の女御にて親の許に座を、業平盗て、春日野の中、武蔵塚へ行也。

(本文は、片桐洋一・山本登朗(2004)に拠り、濁点は私に符した。)

業平と高子の二人は春日野にある武蔵塚まで逃げたとあり、先述の『古今集』注釈書の説明も、この冷泉家流の説を紹介したものであつたことが明らかとなる。しかしながら、こうした説は、『伊勢物語』の注釈の主流である二条派からは、室町後期以降、通俗的で劣るものとして低く見られるようになっていた^{注9}。『古今集』注釈においても、主流は二条派であり、その流れを汲む近世の伝受書では、業平と高子の駆け落ちの説については言及されなくなっている^{注10}。

『大和名所図会』では、そうした排除されていった前時代の古注釈の説も掬い上げて記しており、注目される。籬島の学問的態度と見ることができると同時に、埋もれてしまつた名所を再発見しようとする籬島の試みと見ることもできよう。

以上、『伊勢物語』ゆかりの名所について、籬島がどのような編集態度でのぞんでいるかを見てきた。著名な『伊勢物語』第一段ゆかりの春日野については、籬島はそのことには言及せず、和歌のみを紹介した。一方で、大和との関わりが知られなくなつてしまつた『伊勢物語』第十二段の武蔵野については、古注釈書を引いて挿絵の場面でも関わりを指摘している。だが、そうであつても物語のあらずじ自体には言及してはいない。こうした態度は何を示すのか。

先に触れたように、『伊勢物語』は当時、ロングセラーであり、文人をはじめ、一定の識字階層には広く浸透したものであつた。このことと併せて考えると、籬島の著述の目的・関心は、既に自明の物語のあらずじではなく、和歌そのものにあつたと推定しうる。更に言えば、春日野については、『伊勢物語』第一段ゆかりの地であることが、当時の読書人に広く知れ渡つていたため、取り立てて言及する必要もなく、一方の武蔵野については、ここが「武蔵野」という場所であることも、『伊勢物語』第十二段と関わることも知られていないがために、古注釈を引き合いに出して力説する必要があつたと考えられるのである。

では、なぜそこまで和歌に拘つたのか。それは、同書が、読み物であり観光名所

案内であると同時に、和歌や俳諧を嗜む人間を読者と考え、彼らに実作の参考書として活用されることを想定していたからだと推測される。歌人や俳人達が実地へと詠行・吟行する際には、その場所がどのような背景をもって歌に詠まれてきたかを知る必要がある。同書に多く掲載された和歌や俳諧は、彼らにとってインデックスのような役割を果たしたと思われる。実際に現地に行つて、歌枕としてのその場所のイメージと、現地とのずれを楽しむのも旅の一興なら、古典や古歌に思いを馳せながら和歌を詠み、一句をひねるのもまた一興であった。

そして、このような名所案内記が板本として出版が成り立ち、ベストセラーとなるのも、当時、歌人・俳人がいかに多かつたか、教養としてそうした古典知識を楽しむ者がいかに多かつたかを物語るであろう。

ところで、原淳一郎(2013)は、こうした名所図会や地誌の主な受容層として、下位層の江戸文人、上位層の地方分人、最上位の在村文人を推定している(原2013:95)。原(2013:95)は、こうした知識人が、「旅にでる際には、目的地に沿つたものがあれば、地誌や名所図会を再確認し、旅の予習・復習をするものとして役立て」ており、「そのうえで先人の紀行文で記された情景と眼前の光景のずれを楽しむ、あるいは歴史書の真偽を実地調査で確かめて学び、詩歌の世界に耽つていた」とする。本稿ではこれに付言して、その名所を持つ文学的意味、歌枕の機能と、現地とのずれを楽しんでいたと思われること、また、それらを踏まえて詩歌、俳諧を詠むことを楽しんでることを改めて指摘したい。

一般に、「文人」というと、国文学での使用では、俗世に背を向け、文雅の世界に生きる隠遁的人物との意味合いが大きい。しかしながら、ちようどころした文人が表れた、近世中後期では、「文人」という語は、「儒家・詩人・和学者・書家・画家・歌人・医家から物産・数学・種芸等々」、多岐にわたる分野の知識人に対して用いられる語であった(塚本1977:16)。おそらくは名所図会も、その広範な文献引用から、こうした多方面の知識人層を読者の対象にしたと思われる。そのような書に、実作

目的で過去の和歌や俳諧の例を載せること、また、『伊勢物語』の知識を読者が知っている前提でいることなどから、彼らの多くが和歌や俳諧を嗜む人間であり、また、その持っている古典文学の素養も深いものであったことが窺われるのである。

まとめ

以上、江戸時代後期の名所案内記『大和名所図会』での古典文学作品の受容の問題を検討することで、江戸時代の言語文化において、教養としての「古典」文学がどのように利用されてきたかを見てきた。『大和名所図会』においては、古典作品は、名所の文学的イメージを喚起するものであり、かつ、実作の際の参考となるものでもあった。現在の「名所」は、種々の古典作品によって規定された「名所」のイメージの膨大な蓄積の上に成り立つものと認識されていたのである。とりわけ、和歌は歌枕との関わりもあつて、江戸時代にあつても、名所の規定に大きな役割を果たしていた。和歌が、文人達共通の素養の一つであつたことが窺われる。和歌や古典文学を学術的に学ぶのは一部の者であり、彼らの大半はあくまでも、知的な楽しみとして実作も行いながら身に付けていたことがわかる。文化とは、「役に立つ」ことと直結する実学からではなく、そうした教養から形作られるものである。「名所」にまつわる古典文学や先人の営みに思いを馳せ、詠行ないし吟行する旅は、何と心に残る豊かなものだったのだろう。

現在、小学校教育において言語文化として古典に親しむ方針が採られている。その中では、「創造したり演じたりするのに必要とされる、読書、鑑賞、詩歌や俳句なども含めた創作や書写などの言語活動が重要である^{注11}」との授業指針も含まれている。江戸時代の文化の、郷土や土地への興味からそれに因む古歌や俳句の世界へと入ってゆく方法や、実作を手がかりにして古典世界へと入ってゆく方法は、現代の古典教育にも遙かにつながっていると思われる。

《主要参考文献》

- 1 上月敏子「時をこえて楽しむ小学校古典の学習」『教育フォーラム 新しい学習指導要領 カリキュラム改革の理念と 課題』41, pp.100-111, 2008
- 2 名古屋博物館『特別展 名所図会の世界』名古屋博物館・1988
- 3 白井哲哉『日本近世地誌編纂史研究』思文閣出版・2004
- 4 三好学「名所図会解説」『岩波講座地理学』pp.1-22, 1932
- 5 浅野三平「秋里籬島」『女子大國文』71, pp.35-47, 1973
- 6 藤川玲満「国文学研究資料館蔵『秋里家譜』翻刻と解説」『国文』110, pp.62-71, 2008
- 7 藤川玲満「秋里籬島の俳諧活動」『近世文芸』78, pp.29-41, 2003
- 8 藤川玲満「『京の水』考」『国文』103, pp.23-30, 2005
- 9 藤川玲満「『大和名所図会』考」『国文』106, pp.1-11, 2006
- 10 西野由紀「名所図会」本の挿絵における和歌・発句の有効性」『国文学論叢』46, pp.31-40, 2001
- 11 ロバート・ゴーリ「名所図会解釈の可能性—秋里籬島の句の働きについて—」『東京大学史料編纂所研究紀要』21, pp.146-151, 2011
- 12 片桐洋一『源氏物語以前』笠間書院・pp.148-169, 2001
- 13 片桐洋一『古今和歌集全注釈』(上) 講談社・1998
- 14 深津睦夫編『古今集注釈書集成 浄弁注 内閣文庫本古今和歌集注(伝冬良作)』笠間書院・1998
- 15 片桐洋一・山本登朗編『伊勢物語古注釈集成 第一巻』笠間書院・2004
- 16 高梨素子編『古今集古注釈書集成 後水尾院講釈聞書』笠間書院・2009
- 17 原淳一郎『江戸の旅と出版文化 寺社参詣史の新視角』三弥井書店・2013
- 18 塚本学『教育社歴史新書へ日本史』84 地方文人』教育社・1977
- 19 市古夏生・鈴木健一編『新訂都名所図会』(2) ちくま学芸文庫・1999

《注》

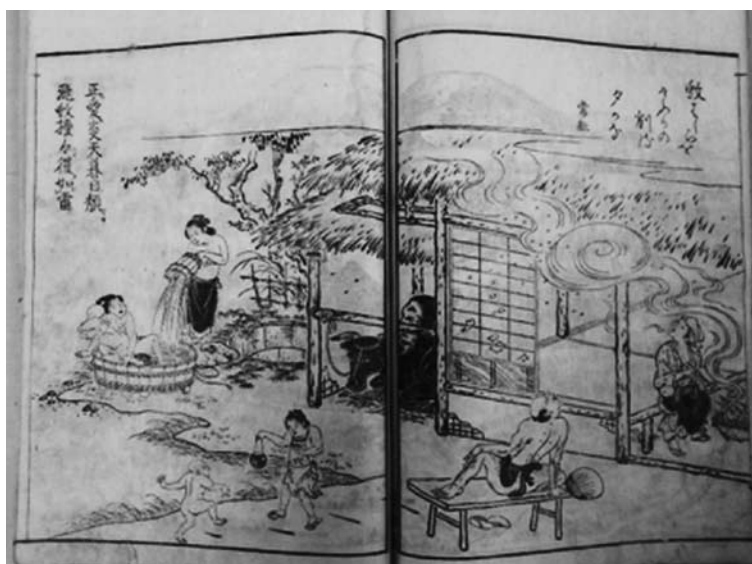
- 1 「教育課程部会におけるこれまでの審議のまとめ」・2007年11月7日。
- 2 『角川古語大辞典』「名所」項目。
- 3 正確には、地理学においては、こうした名所案内記についても、「近世地誌」の一系統として分類するが、本稿では、領主が領地について把握するためなどの目的で編纂された「地誌」とは区別して、「名所案内記」として部類する。なお、地誌の定義については、白井(2004)参照。
- 4 榎英一「名所図会概説」(名古屋博物館1988)。
- 5 三好(1932)では、「名所図会」を通俗の読本と位置づける。「名所図会」の序や凡例に「坐ながらにして」(『都名所図会』)名所の事が楽しめるようにしたとの記述があることからすれば、読物としての要素が強かったと思われる。『都名所図会』の本文は、市古・鈴木(1999)に拠った。
- 6 秋里籬島については、浅野(1973)、藤川(2008)・(2003)参照。
- 7 藤川(2006, 1)。「大和名所図会」の成立や編集方法については、藤川(2006)に拠るところが大き。
- 8 片桐(1998)では、佐賀大学図書館本『古今集注』、宮内庁書陵部『鷹司本古今抄』、大阪府立図書館本『古今為家抄混入注』、初雁文庫弘安十年本『古今集歌注』などを紹介している。だが、武蔵塚については、その殆どが、本稿後述の良峰安世の塚ではなく、「小野美作古(または美作五)」(小野美作古については未詳)の塚としている。
- 9 片桐洋一「解題」(片桐・山本(2004)所収)。
- 10 たとえば、後水尾院の『古今集聞書』(明暦聞書)には、
「かすが野は—」、野遊歌也。伊勢物語にては恋の歌也。わか草のつまとは草の下もえしたるを云、正説也。妻を若草と云もあり。五文字、此集に改て入也。

伊勢物語に、五文字を改めて入たると云説あり。作物語なる程に、撰集のやうには有まし。此集に改めて入たると云、可然。けふはの、はの字、大方に可レ見。今日よりさきはと云心也。野遊眺望に青々とある、見事なる若草おしき事なるほどに、今よりはなやぎぞと云心也。野を焼事は草を生ぜさせん為なると也。此歌野遊となくて題しらずとある事、伊勢物語等の心ある故也。

(本文は、高梨素子(2009)に拠り、濁点は私に付した。)

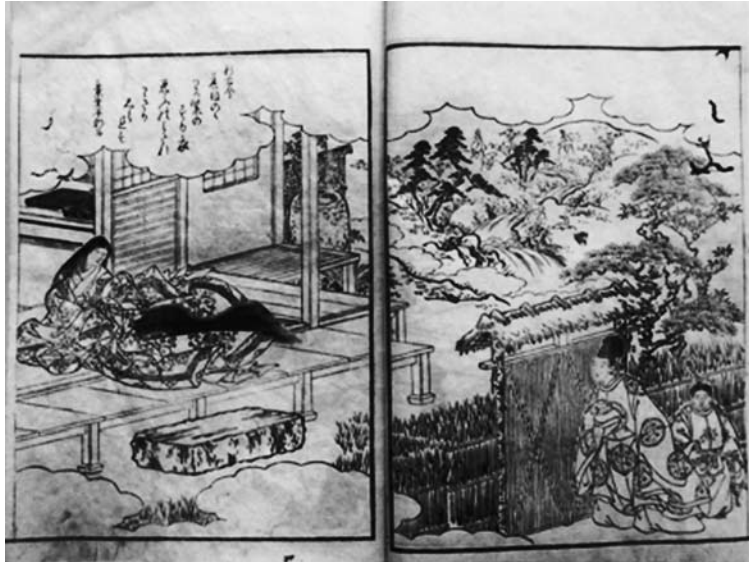
とあり、全く触れられていない。

11 中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会『審議経過報告』2008年2月。



【図1】

(画像はすべて架蔵の寛政三年板本。)



【图2】



【图3】

分野	件数	挿絵に引用された件数	備考
和歌・歌書	95	13	うち2例は籙島の狂歌
俳諧	27	25	うち7例は籙島の句
物語および物語注 釈	26	1	内訳（説話7・軍記6・王朝4・注釈4・歴3・歌2）
史書および注釈	23	0	
寺社記録・縁起	20	2	うち8例は縁起
漢籍・漢詩句	12	8	うち4例は籙島作とみられる句
神道書	12	0	
仏書	10	0	
紀行文	9	2	
伝記	8	0	
地誌	7	0	
随筆	4	1	
有職故実	4	2	
辞書	4	0	
類書	2	0	

【表1：『大和名所図会』に引用された文献の分野】